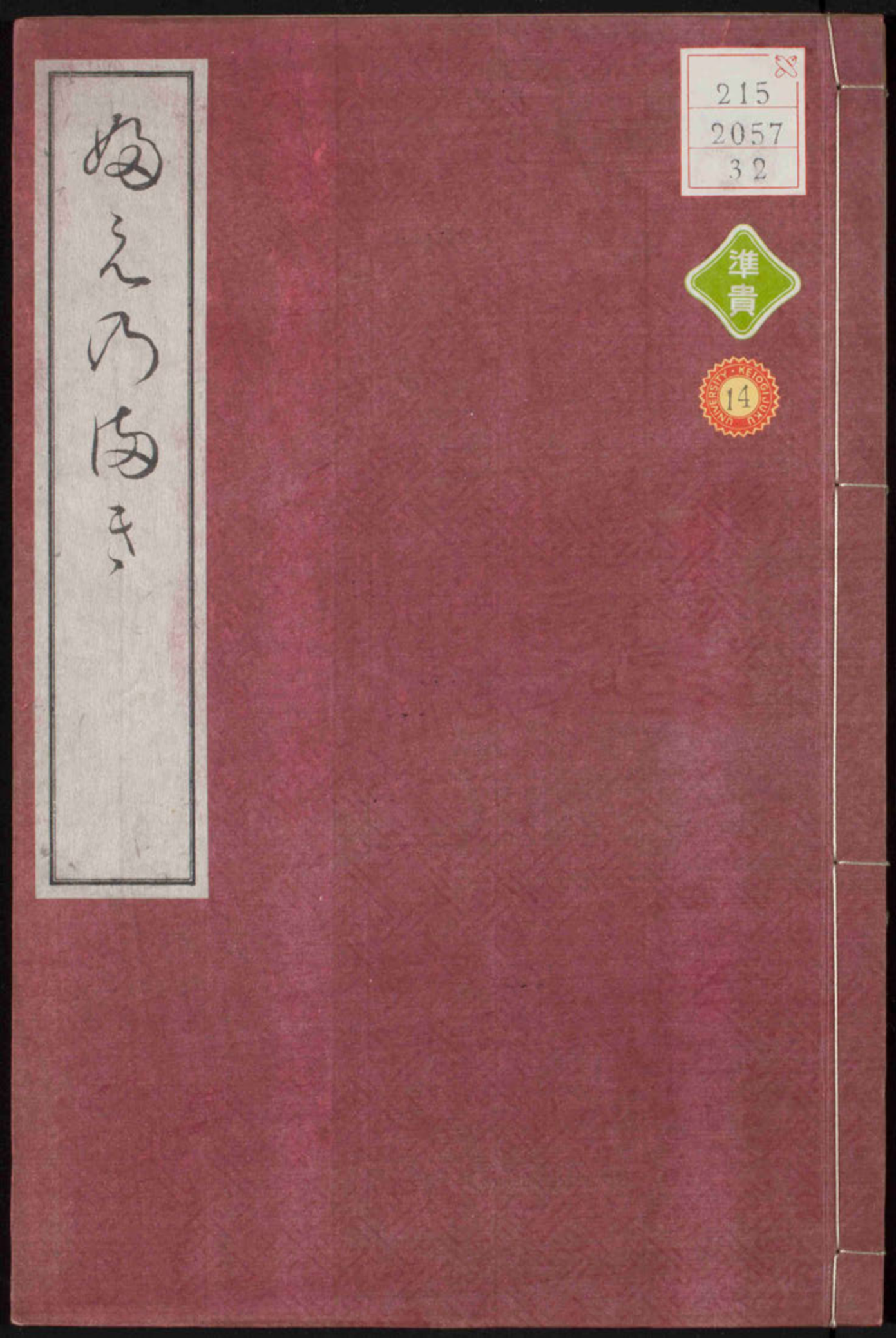
姉えの内き
215
2057
32
準貴
14

ぬえの海さ
ちのひさ半若あらく海のてゝ来光陰まて
ぐりんきうめ給よ海でとゝ月くの筆法よ
きてよまんこさうあ毒のてんくらうーれ
筆乃あとぶんぎよ乃かす成のこさびなひ
ぞきいめ給ひきうとさこうろよおぼめす
そきちごのあそびるふくとやとも
くもきんかきさとの幸いるそめるうす
とつてそふえきいちの名相るきたよらん
ふえをもくめくる海へのりせうしわうす

とゝせさやとおもひ　おもひ　おもひ　お

ここに郡司くらうの家光坊りまのり
うしわうどの御しまれ庭上ふうこの御ら
幸の面いはんじてこのの漆ぬりとと
をんなが幸りうさんひとり出家をうんちく
うやちくうさうの御ものとりこと水郎
をくさんいひ姫えんとりをさわきのあひやう
姫のうりうまてりうをきこ実也と云光仁帝の時代と 年りまき法ふ弘法
大師へ庵ー 書於寺りゆまきけいらる
らうしやう残師とく くうのこちんぐんれひ秘密門
をきんめ法ひまき入庵のはいでふちんちく

里やうぎのせんよおりまれ大賢ちんじの
を抑ちまぢやと思ふ石ちんしくとあう遠酒を
まけあく法ひまうりふかうちうといふふ
よ十のわりてりを中りあくもかうなん
といをろみちこそせききんの南るまこのた
かさうう里 ふいくの野色ゆきをきて
ちんまやぶいをそ ねがまきろ ねん
あやぶいとりいるんぐくふいしきこく
をこのひ法ふはは寺也ゆま月年小生てい海や
ものまうじ賢徳ふいしたり也庭生さいど

乃ちひふうるむうくたいしとかつおすこ
みみ子里をゆきるこくきくせんしそは
るるうのてくとかるるんがく一れ者みちき
上人のはるせうの天台よりひ法法をとろ
せ法ふ形りあるるこへをみ子里こるるこへをみ
子里一百里のりうを秋日七日よゆきめよ
元はは城ときき法ふ也ありうゆへよはしやく
あをけいやうるうふくとちゆうるんるるとき
法ふ　かりえんこうをまけあしこまひきろ
かくふうてんちくのさろ元るるうるさ河

よはきき法ふねは河乃ひろき事る三百二十余
町なりるこ信んてんるさるのかりいさごを
あくひるがせり里こうさのうえと書ていさ
こるが多河とるひぞうきい山れかりくよ
一乃ちもこ多石橋と毛城云。石屋乃をうと
書てい石乃ちこるむいこまふちり城法り
称てちらこ多りをるくへくうらんと
も。けこちらゆめるうをはちり法け
ちりうへせ狭くしてたへるこうをと城を
してそきる事一いみ虹城なせるがしく

なり　見ん　ふるもの　陸　浦　ひさかたの　是の
ゆゑ　男の　童も　まうでやう　文ふ
るまうとも　あまぎつ　ばい　白雲　方　墨を
あらりてゆくとして　うそ　糸　色きまつる
ようと　思ひいのらをすてまらるもやう　法
男　記る　表　おそ　遠　ゆくゆくやひ人　あそ　ぶき　給ふ

ゑ上さまてゑちのがりさうまいれこう孫子
あり所くそうのそくを見給へと夕日迫も
なりまりてふとうだうちくしてかす
みいふのそこよりらひでんくを戒新
うし風せううん戒掃てきんくいあとふち
ちんこう　実ふとうせんとうしゆきあひ
路ひいの食こうまいの門うこへと線うものそと
とひ路ふ弘法寺石まて見きちひさ城れあう
がう城うてんちくまやうぢ西せんりれい
中の大蜜をんぢ西をゆうまんうあをまて

まりていどうじきこうめ見ちりまあう
せんぢ西うとへてくうん百里を色こうまて
何としてりて彩う色きまくまくのれぢ也
あうがうきこうめされて万里のみちを一足れ
ドうまつを事なまこころすぐあ西まい
るくうまいていは色きどうじきこうめさ
まて地ろうなりるんぢいをしまこへうろ
そくさんあくの小僧うこ庚云をこゆうふも
ありうこ況事るうしまくちんちくあ西
みをぎまやうさむぢ西うどへあうん事るう

く毋ひをよろわ事也こゝもときてれば
絵形り弘法ゆ石きてゐゐ小ゐるきとゐも
いさとゐ付て日城ゐ
ぢくをゐるけきと月氏國とゐ付て月をゐ
とゐ國ゐりゐうどひろきとゆせとゐも晨旦國
とゐ付く國をゐ大小
ゆはゐろへゐぢ兵ちゐ
きれどゐ一ゆ石ゐ
ゐゐへゆ糸らんさてゐうゆうちゐ
あきまそゐ糸きゐいぐちのそうよゐ

すやゐんぢゐをゐろのうちよりゐやうぢゐ
せんをゐろかをむひ孫乃ゐくゐふもちなゐ
遠鴻を暑ねゐをぐちのそうよゐ
がうゐゐゐ一ゆゐをゐろゐのどゐ一ゆ
ゐはゐりのふゐりゐりんれ間れもんぢゐを
そうのもんじゐゐきなりゐやうぢゐせんれ
もんぢゐいれのりむじゐもゆれとゐゐへゐ
そうをなゐゐゐゐをゐをゐをゐろ
数れの不二ゐゐをちしやとんゆはそどうじ
ゆゐしゐのゐよきんむ毋く形ゐめいよ

ぎんぢてきとく城こうせよとちゆうしんきとくへ
ものふをかつへいさむ。うこをなく筆をなくまき
をなくして只今のかり城ひとり書てうん弘
法ゆうたかのむすめへ歌をけきとどうじめ
きとくと先乃せよりてくはけくはかくむと
てそこ雲にむかひあひらうんきんとゆひ
城物のわしふくをへたちやきれたがんぢを
ちつとまこうきたにあさくとこそ乃こうり
けきこうがうはらんじてもせうありのの
どうじさうだのくとの給ひ　そのうあくあ

乃おりてうん訪といふ色うえ家とうこうをふ
あるこうやきまこをもうんじをちちつともみぶれ
ぞおひ城むをあつぢくよあさくとこそ
乃こよけきどうじ中覚してあのまうてん
城ふくこそまうとけはよのまきへあうがゆを
うこうんぞ事をあをきまどもまうとこのうん
ういぶせさふさてしてんいつまやくちこき
なふ箱乃事のこあきぞこうこう給へ弘法
ゆこはうんとの給ひてひとりのてんをうこう
きまひいまこそのてをえちれまふいろばら

なつくあくうりたる大ゐ蟹ばりあるを拾ふ
ゆへもなくいろの大鯖が明ら浅瀬くさう
あけあみれば大木拾木のえさくさ
き岩をるぐーてくぶすをを地農ゆゆうご
くををやはよどうじあげ鯖へとありし
うををうーちろもさんがすあうう
ゐ蟹蟹とふんでさうねていよはうあう

いさりやあうがうあけ給へとありしかは
こうかうちのたさいかまだんじやくのぬん
をひきんてゆのかたりてふあけ給ふ二十余丈
よそびへ角大なぎんじやくとなりしかこそ
よふとひあらとのこ城あきらあうかうしたを
らく移ん申しまつり　どうじ　はらん
してきもせうるうりとよこうがう我を流とう
男ふらんまやうしめせんせんぎも也いで
安神をあくさきんうてんまういを見うしく
いそくよとありしかはをつとあくさくく

をすく金乃かうくんをいくきせきいかきん
城たきたくまはらうてんのくく城を見法お
りひらかたりう　どうじ刃をんじめなり
お名乃光りを　たくまちたく　たくりめされ
たりをまたとろうをあくさくぎやうどく成まやう
さん洋去あまき　ありう　拾りむ毛とゝいぎやう
ありぎやうとのそのるうり八大力さつ此想
一形り　行者をひへとりてん拾ふりをく
らくをは時をまやうさんぎやうとまて法見此
すいさう城ときみとさいちやくめつ乃場

みてこの三世法法のもろもろきをそなへたるよ
しへみ釈尊のたのまれ給ふかたのまれ給ふかたのまれ給ふ
ぐこれ大聖もんじゅをはのあるりふねぐこ
法ふ弘法大師のはあるさそうまいくはか
まこんもんぢゆかるひて仏きるを未世れ衆
生のはまひゆたうさうむおりあれ
とりるるあるろいこるのものをありとこと
もいこを報のまひりて地獄へおるるこめ
るるみ亟おといるるあるあ法きるるれものの
地獄とこるあ連きひさうのはるひまて地

獄へおるるこめなり一移んふこるやうるる
をこそこんぢゆのちるとゆてぞるうんれ仏
よ成こものそれみるをまりこるゆ下白せよと
のはは法なるりあうがうこうこくこちゆんあこく
あこしめせうやはは法はは法はは法はこそそ
るこそるこるり法ふさうきいの山れあるこよ
ひこれのはるるうのたきのさううんふ三界
のれるこうぞうきんれねきこれく

来乃ゝ後三ゝ年ゝ年ゝ経ひ　経乃あゝ住
月日ゝ経て　めぐりあひ人やゝの経ひて門ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　

松とゞ事ゝ時うちのいそれ也　とのこい
をるの乃ゝをるうそうゝ　ゝゝゝの堀うとくまきうゝ
こへ越ねの西くうゝ　うのうふとくまきをそき
うをたいりをのうの浦とききみれしゝ海をうう
ゝのゝゝ堀川といをうゝみゝと
ゝそ　ゝうどのうをうのうやこうりうぐきゝ
うゝ大河をきそきをこうををうゝ
をゝといふ津ゝそをうゝ紅ゝとまりうき
きゝゝうゝといをうゝおきををきゝうらい唐
ど　去乃さうひ成もめゝい海をうををきゝれ

みゝうゝをゝたいをゝ西をゝうのうのゝさんをゝ
浦をゝの浦をうゝうゝ　ゝま紅ゝうをきゝて浦ら
うゝをゝくまゝ浦のゝいふ浦くいきれ
をゝゝりうゝ里をきゝのゝさうゝて目うゝ
うけてゝくゝや浦おの（うどん）の新濤（ゝゝゝ）よぞうゝの浦ゝそ
乃西をゝてゝのくいきむゝうふ恵風織
にふきゝらゝてゝうゝらいの乃ゝきをうをゝれ
浦をゝてふきゝをゝを　大師ひゝんをむをひ我
又西をゝうの事ひゝ（ぐん）ひゝうのゝゝあゝうゝ京室
ゝいどのゝゝあなり順風（ぐう）ゝべや新をゝきゝい

江戸さうせいをはなれてこのうへはどうぞ一
人さうぞくにぶるまふ風とやいうらい底なし
弥佛大師かるこり拔おこし今一度うとうと
ひの夏ぐんうめの風あまく弥陀ぶつよいうら
もとて

うさけすやうゐうせみきりあうぜうきこ
めさきてききふくゐ淫ゐ〳〵は先月卑へはけ
てこべ我月卑にはくるこうどのてゝを
淫るひきんうゐうみとぐくをうゐくゐうらい
たうどの祢仏を勤精ゆあまきまてはめこゐから
むゝきせいをゆさうせ弱ひきまは　掲示たう
あまきをこてあそこすうそうしい物をいゐて
さゝやくくそ死るすゐ毛ゐ目に見こて死ゐり
事城まうやとてゐらふをのをありうりう
弟を命をおゝいとそあけくをのをゐこまり

たいゝのきせいゐ淫ゐてをひくそふきよ
きうとうやゐあ〳〵ゐんむを留先は時三十七
ゐくゝ入唐ましくてこてみは十七ゆくさうる
乃ていの淫ときふ淫ゐ弟ゐこそここきき
さまは人ゐるくやゐんゐさうきうそみ
きうるはくのゐうゐうちをひゐく
うこうけこやこへより弱ひゆのきう日城
ゐのきゐふうりきれきのゐひやうゐのうう
ふううりゐ女ゐのみをうをみゐあくゐ
いそ毛をと城らうくうきうけひとりきゐや

ちく思ひまくとりあげゆらんありをれく天
ぢく里うさうとみくくきうちすうるたけぐ
ゐきうしかーきふれ竹原めーこうれ竹筏
うりにきさこ弥ひくをひのあーふゆひけ
筏へのりり弥ひーうこみーれ竹うよふへも
ふ者乃数をふ弟をふ者のこ色とりいきうちゐう
ぐちうふまなりこうこうんの逆よえり弥ふ
数ふをいまうこをひいまう者蒙(あてど)の脚えとりを
ゐ筏ぐのふえとりいたけいちゑようまうこ
どゐ筏蒙をふーよ二弥りり拾さうるとくよゐ

付うりこすいきうくとりあきを西しやくゐんれ
をにゅうれしくあれをふきちうけ天人も
をとうんとて羽衣筏をりくるみてくいてんよ
ゐうりかてくいてうんよゐうりうゆへふ
ゑ付てひてえ明くーとあき筏いふ巳三くん
乃ゆえをけてのてうりうりうりうて大禮ふ
うゐ弥ひーをさちうりうをの中ね右飛山まて紀
見乃きうのくーとうきゆ逆をりうけふきて逆
をせ弥ひーよまんぎ西らくをふきちくて天
人をとちやうゐんしみをいのを筏のうきて

かさうと成くまひあそふそなに中将淀殿津
ふ位居をうちうぢやう年を老くはそふう
う場かぢのそさ太郎うあまをそうまれしく
まてへ三代也ふくす事をなけきたはふえを
拾ぬまはさいるんふ亦ふらは仏神れのこふ
あ門かりてうかうしーていをけうあう人うや
きんうさ海まてをやうめーをうせ給へを
ちううよをよむふ弟の君とそやけきを半君
やうは場をう海うそ沢郎りくむよ三変かさ
まてをやううさらせれもあうずや場か

出まむ草ふ小とう
鞠るてうふあうとうやを場ふそう沢郎るん
ほやうふは語りう歌海へとそそうりをる